連載　第112回

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家　三木　哲

ホイアン街並み　通りの奥に
来遠橋（日本橋）がある。

ハノイ中心外周約 1.8㎞のホアンキエム湖の風景　タンロン遺跡

●ベトナム反戦の旅

1960～70年代、ベトナム反戦運動を闘ってきた私にとってベトナムは憧れの国である。

連日、執拗に北爆を繰返すアメリカに対し、ベトナムに連帯し、戦争に反対する熱い意思を表示する運動をしていた。

朝鮮戦争と異なり、ベトナムは、ソ連や中国から軍事的支援を受けず、単独で世界最強のアメリカ軍と戦い続けていた。

今、ウクライナが欧米諸国の支援を受けつつも、単独でロシアの侵略と戦っているように、ベトナムは長期に渡り単独で戦いを継続し、勝利した。

ベトナムツアーは、2007年春に、マンションリフォーム技術協会が計画し参加を呼び掛けた。この組織は、JIAメンテナンス部会から独立し、修繕メーカーや修繕施工会社との情報交流などを目的に設立された組織である。

参加者はメーカー、施工会社を含め総勢28名に及び、ハノイからホーチミン市までバスで縦断した。

米軍による北爆の傷跡を思い描いていた私の眼に映ったハノイの街の風景は、爆撃の傷跡は全く見られない、静かで落ちついた緑豊かな街並みであった。

ホテルで朝早く目が覚めた私は、ハノイの街に散策に出掛けた。町の中心に広い池があり、土手の上に高木が整然と並んでいた。

池の周りを時間をかけて歩いた。

かつて、この頭上を本当にB52爆撃機が飛び爆弾を投下していったのだろうか？

あれから30年近く経過し、静かな風景からは全く想像ができない平和な時間が流れていた。

この平和な風景はベトナムを縦断し、旧サイゴン（ホーチミン）に至るまで続いた。

一晩中、防空サーチライトを点灯し警戒を続けていたオリンピック直前のソウルの緊張感とは全く異なる。

スターリンが主導するソビエト軍と中国共産党軍が突如、韓国に進軍し、アメリカを中心とする自由主義陣営の連合国軍が押し返し、38度線で休戦に至った「東西両陣営対立」の朝鮮戦争と、ベトナム戦争は性格が異なる。

第２次世界大戦時、フランスの植民地だったベトナムを大東亜共栄圏を掲げる日本軍がフランスを追い出した。戦後、フランスは旧日本軍が建設した飛行場・ディエンビエンフを占拠し、再植民地化を目論んだ。

ベトナムはディエンビエンフに立てこもった旧宗主国フランスと戦い勝利した。

フランスをバックアップしたアメリカ軍に対し、ホーチミンやボーグエンザップらのベトナム軍の戦いは、植民地支配からの解放、民族統一を戦いの目的とし、1975年４月30日　サイゴンを陥落させ、ベトナム戦争は終結した。

1991年12月、ソ連邦が崩壊した。

ベトナムは国を開いた。北朝鮮は国を閉じ核武装し軍事独裁国家の道を選択した。

旅はハノイ市内をバスで観光し、ホーチミン廟や、アンキエム湖、タンロン遺跡、旧市街地を見て回った。

翌日、1802年にベトナムを統一したグエン朝の王宮など歴史的建造物や遺跡が残る古都・フエに向かい、ホイアンで宿泊した。

トウホン川の河口に開けたホイアンの街は16世紀頃から国際貿易港として栄え、中国や日本を中心にヨーロッパ諸国などとの貿易の場となった。海のシルクロードからホイアンに渡ってきた交易品の中には当時の日本製品も数多くあり、江戸幕府との結びつきが強く、朱印船が頻繁に入港し、1635年の江戸幕府の鎖国令が出るまでは活発に取引が行われていたと言う。

当時、この街には1000人以上の日本人が住んでいて日本人墓地もあり、日本人街も作られ発展してきたそうだ。ベトナム戦争では戦場にならず、古い街並みや歴史的遺産の多くはそのまま残った。

旧サイゴンから帰国した。

ベトナムにかけた思いは熱かったが、あっけなく旅は終わった。

緑が豊かで静かな首都ハノイのベトナムと、核兵器開発や軍事に特化し肥大化する北朝鮮。両国の置かれた状況と民族の柔軟性の違いに思いを巡らせる旅であった。

みき・てつ
㈲共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。
URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。
建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。